

教職大学院

Newsletter

No. 60

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2014.3.1

「カンファレンスの学習」と

Teacher Educatorの課題

武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科 田中 孝彦

昨年の末、「教師の専門性の再検討と教師教育における『子ども理解』のカリキュラムの構想」という長いテーマを掲げた科研費共同研究グループの一員として、福井大学教職大学院を訪ねた。その折、私が参観させてもらったのは、ストレートマスターの「カンファレンス」の時間と、学部の「教育実践研究A」という授業だった。

マスターの「カンファレンス」では、M1・M2を含んだ4・5人のグループに分かれ、M1の院生から「拠点校」での「実習」の状況、そこで感じていることや直面している問題が語られ、それをめぐる感想・意見の交換が行われていた。

学部の「教育実践研究A」では、異学年からなる小グループに分かれ、四年生の一人の学生が、自分自身で重ねてきた生活と学習（実習を含む）を踏まえてまとめに取りかかっている「個人最終報告書」の進行状況を報告し、それをめぐる質問・感想・意見の交流が行われていた。この「教育実践研究A」に関しては、事前に森透先生から「大学にける『アクティヴ・ラーニング』、新しい授業への挑戦」とうかがっていたが、参観させてもらった時間については、広い意味での「カンファレンスの学習」の試みと言ってもよいように感じた。

私は、この20年ほどの間、北海道大学・都留文科大学・武庫川女子大学の学部・大学院で臨床教育学の研究・教育の仕事をしてきた。その過程で、教師・援助職教育のカリキュラムに、「カンファレンスの学習」を位置づける必要があると考えるようになり、その具体化を模索してきたので、福井大学の教職大学院のマスターの「カンファレンス」からも、学部の「教育実践研究A」からも、多くの刺激を得た。そして、

次に訪問させてもらう機会には、現職教員の院生の「カンファレンス」や現職教員院生とストレートマスターの合同の「カンファレンス」も、是非見せてもらいたいと思った。

ところで、学部の「教育実践研究A」の時間が終わる少し前に、担当の教員の方から、学生諸君に対して感想を語るように求められた。思いがけないことだったのであわててしまったが、おおよそ次のようなことを話したように覚えている。

「今日みなさんが語りあい学び合う姿を実際にみせてもらって、これはみなさんにとって間違いなく大切な意味を持った学習の時間になっているように感じました。

ただ、人間は、情動を強く揺さぶられるできごとや、これまでの自分では対処しかねるようなできごとに出会った時には、それを言葉にすることは簡単ではなく、沈黙と熟慮の時間を必要とするものだと思います。『カンファレンス』は、参加者一人一人に、沈黙

内容

「カンファレンスの学習」と

Teacher Educatorの課題 (1)

富山市立堀川小学校学校参観にて (2)

カリタス小学校授業研究会に参加して (7)

伊那市立伊那小学校公開研究会に参加して (8)

宇都宮ラウンドテーブルの報告 (15)

長期実践報告会に参加して (20)

福井県特別支援教育センター

実践研究発表会に参加して (22)

書評 (23)

の時間を許し、熟慮の過程を支えるものでなければならぬと思います。とくに、カリキュラムに位置づけられ、制度化され、参加が義務づけられた『カンファレンス』では、ともかく発言しなければといった雰囲気になりがちですので、このことについてとりわけ意識的に注意する必要があると思います。

教師になる学習の過程で、あるいは教師としての再学習の過程で、長い沈黙と熟慮の時間を経て発せられた他者の言葉の深さ・重さに接する体験を持つことが、教師になった時、あるいは教育現場に戻った時、学校生活や学習活動に簡単には適応できない子どもたちの言葉にならない表現を受けとめ、理解するための栄養になるのではないのでしょうか。」

こんなことを短時間に抽象的に語ってしまい、私は、語りながら、その場で反省していた。どういう質の「カンファレンス」にするかは、参加する学生・院生自身の課題である。しかし、同時にそれを支える教師教育の教師 (teacher educator) の課題でもある。そ

して、これは、今回の訪問を通して改めて強く意識した、私自身の課題なのである。

一回一回の「カンファレンス」で、学生・院生にどのような報告・発言を求めるか、学生・院生の報告・発言に含まれている経験や模索や課題の核心をどう受けとめるか、一言も発せずに聴いている学生・院生の姿から何を讀みとるか、そして教師教育の教師はいつどのような言葉 (概念) をどのような仕方で発するのか。「カンファレンス」を教師教育のカリキュラムに位置づけたとき、教師教育の教師には、こうした性質の判断 (人生体験と研究蓄積と教育経験が凝集されたような) が瞬時に求められることになる。

これは、相当に難しい問題だが、福井大学教職大学院のスタッフの方々の実践的・研究的努力に学びながら、考え続けていければと思っている。

富山市立堀川小学校 学校参観にて



福井大学教職大学院 特命准教授 山野下 とよ子

2月12日(水)富山市立堀川小学校へ一日参観させてもらう機会があり、行ってきた。福井からは小林先生、院生の後藤さん、木子さん、堀江(春)さん、笹井さん、そして指導主事の野大先生、成和中の孝久先生と私の8名だったが、他に東京、静岡、新潟、山形、福岡、京都、兵庫県からもきておられ、総勢26名での参観だった。堀川小学校へは前から行ってみたいと思っていた。堀川小のホームページに『子どもがじっくりと考える授業をすべての教師が実現』とあり、その実践のポイント1に『授業公開を日常的に行い、一人ひとりが自分しかできない授業を実現する』と書かれてあった。「自分しかできない授業とは?」とても興味があった。

小林先生から「朝7:50から朝の活動があるから」と伝えられていて、5分ほど遅れて堀川小に着き「どうぞ自由に」と言われて校内を歩き回る。校舎はH型をしていて、「〇ねんのまち」と名付けられた学年エリアがあり、中心にプレールームの広い場所がある。子どもたちはそこで鉄棒に挑戦している子や横の

廊下でなわとびの二重跳びに挑戦している子など思い思いに運動していた。夏場は外を走るとのことだ。壁



面には学年目標(3年は「あつい心のサン学年」など)や季節の「詩」がたくさんあった。8:15から子ども達は頭をバンダナでしばり、それぞれの担当場所(?)の掃除に取りかかった。2年生でトイレ掃除

をしている数人に「水が冷たいでしょう。」と声をかけると「いえ、トイレがきれいだと気持ちいいから」と返ってきた。感心していると、一日案内して下さっている石田先生から「どこを掃除するかは子どもが自分で決める」と聞き驚いた。とても寒い朝に玄関や外を掃いている子もいた。この朝活動は『子どもの追究を拓く教育』の1つの柱として「身のまわりの環境をみつめ自らの手で整える子ども」をめあてにされていることだとわかった。

2つ目の柱として「くらしのたしかめ」という時間が設定されていて、朝は8:35から、授業後は「帰りのくらしのたしかめ」がある。ここでは「仲間の感じ方などを理解し目当てを確かにする子ども」をめざす活動だとのこと。1年生のあるクラスに入らせてもらった。一人の女の子が「(玄関掃除をされていて) いっぱい砂がとれてうれしい」と話したこと、次々と「いつもと同じなの?」「工夫したことは?」「どんな掃き方をしているの?」「砂だけでなくビニール袋やティッシュも落ちていることがある」など、その子の話に耳を傾けて言っていた。1年生という時期は「自分の話を聞いて、聞いて」の段階なのに、まわりの子の話をこれだけ集中して聞き合っている姿に、またまた驚かされた。石田先生が「この学校がずっと取り組んできたことは【子ども理解】と【追究】です」とおっしゃっていた「子ども理解」の姿がここにあると思った。教師がまず一人ひとりの発言にじっくり耳を傾けていく、そして、まわりの子らに「そのお話を聞いて、何を考えたの?」や「なかなか取れなかったのはなんでだと思う?」など促していく。「帰りのくらしのたしかめ」の時、ある子が初めに話した子の発言内容と違うようなことを言う場面があった。普通なら「関係のない別のことは言わないで」と言いそうだが、担任はそうは言わず「誰の話の話を聞いて言いたくなかったの?」と聞いて、その子が誰のどの話からつなげたのかを聞いていた。

そして「授業」。2限目4年の「理科-季節と生き物-冬の自然で見つけたこと〜」、3限目6年の「総合・道徳-友とは〜劇『走れメロス』〜」、5限目に



特別支援学級と4年の「社会-ゆたかな自然を生かす町〜氷見市〜」を参観させてもらった。どの授業も子どもの問いから始まって子どもの発言(考え)で作られていく。教師はそれらの考えを板書にしていくのだが、絵をいれたり、チョークの色を変えたりして実によく流れがわかるように書きながら「どうして調べてみようと思ったの?」「今までとどこがちがうの?」「どんなところで実感?」「そこで何を考えたの?」などと子どもの発言をつないでいく。板書を見ると子どもの追究が見える。まさに石田先生が言われた「授業は子ども達一人ひとりが自分の可能性を切り開く場」を見せていただいたと思った。

このような仲間と聞き合っていく「集団追究の場」の前に自分の追究を大事にしていく「一人追究」の過程がとても大事にされていることも伺った。壁にぶつかっても安心して仲間聞いてもらえる場があることで学び続ける子どもが育ってきているのだと思った。教師達はこのような授業づくりに向け、いつでも授業公開をして意見をもらい、また学期一回は「追究学習」を計画し、子どものノートの分析から授業に臨むが、授業では一旦それを捨てて子どもの考えを受け止めて進めていく「瞬間解釈」の大事さも教えてもらった。とても有意義な参観だった。

教職専門性開発コース2年 後藤 歩実

堀川小学校には昨年度はESDの研究発表会の時に授業を参観させていただき、今回が2回目の訪問でした。堀川小学校は「子ども理解」と「追究学習」を柱として、授業案の段階から特定の子ども発言が予想されており、その発言を元に授業を展開していく想定がされていました。そして、実際の授業も教師が想定した通りに子どもたちが発言されているように見え、

そのような授業に対して、発言のない他児の学びをどのように保障しているのだろうか疑問に感じていました。昨年度の研究協議会后に堀川小学校の先生に話を聞いたのですが、その時はその疑問を解決できないままでした。

今年度再び堀川小学校を訪問する機会が巡ってきたため、昨年度の疑問をもって堀川小学校に行きまし

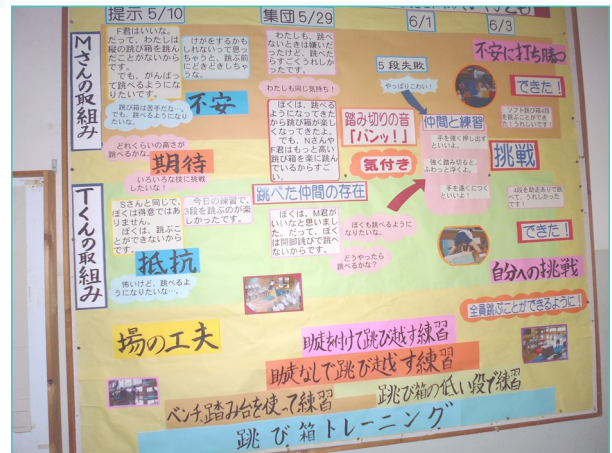
た。そして今年度は、朝の活動から堀川小学校の特色である総合学習の授業まで、ほぼ一日参観することが出来ました。総合学習の授業では、昨年度と同様の雰囲気で行われていました。授業後の参観者と堀川小学校の先生との懇談会で、その授業の意図を聞くことが出来ました。それは、集団追究と言われる総合学習の全員で発言者を想定して授業を進めるという一見すると特殊に見える授業には、集団追究の授業がその後の個人追究を深めるためにあるからだということが分かりました。そのように全員の個人追究に刺激が加わるような子どもの発言を取り上げるため、教師はビデオや記録を分析して、「子ども理解」を徹底して行っているという話を聞くことが出来ました。

堀川小学校の子どもたちの様子を見たり、先生方の話を聞いたりして、学校としてとても魅力的に感じました。その一方で、このような授業研究を何十年にもわたって行い、外部に対しても積極的に公開しているにもかかわらず、広がっていかないことにはその徹底した「子ども理解」に対する負担感があるのではないかと感じました。

以前大学院でのカンファレンスでの話で「見る」ということは、それ以外の部分を「見ていない」ということになる。」と言われました。堀川小学校の取り組みは、「見る」ということを徹底しています。徹底しなければできない授業だと言えます。だからこそ、

そこに価値を見出し、徹底してやるという覚悟が教師には必要になってくるのだと感じました。

今年度堀川小学校を参観して、昨年度の疑問を解決することが出来ました。また新たに、堀川小学校の先生方がどうしてそこまで「子ども理解」を徹底することができているのか。また、そのような授業づくりを継続して続けられるのだろうかという疑問がわき出してきました。いつかまた堀川小学校に行きたいと思えます。



2月12日に堀川小学校を参観させていただいた。以前参観させていただいたときとは違って、時間に余裕を持って校舎内を見て回ることができた。校舎の中にはたくさんの掲示スペースがあった。学年別に縄跳



びの記録があったり、50・100メートル走の記録があったりと、校舎全体が子どもの自己肯定感を高めるための空間として機能しているように感じた。

朝に校舎内を見ている時に「今日はどこを掃除しようかな」と話し合っている子どもの姿を見かけた。壁

教職専門性開発コース2年 木子 泰宏

に校舎の一部の地図が貼ってあり、それを見ながら相談していた。その二人は人手が足りないところを考えて掃除場所を決定していたのである。好きな場所を掃除という偏りが出そうなものであるが、その心配はないようだ。そこまで考えて、掃除場所を選べる子どもがいるというのが驚きであった。掃除の時間に校舎内を見て回っていたが、掃除をされていない場所がなかったように思う。

その後、「くらしのたしかめ」の時間を参観させていただいた。1年生のクラスを参観したが、それがすごかった。一人の子どもが朝の掃除について話したのであるが、それに対して他の子どもたちがどんどん質問をしていった。あれだけ質問ができたり、それに答えることができたのは素直にすごいと感じた。この時間だけで非常に説明上手になるなあとと思った。

先生は基本聞き役に徹していたが、最後に「今日〇〇さんの話を聞いて、みんなは何を考えたの」という質問をされた。おそらく自分自身を振り返らせるのが目的であったのだろうが、少し発問が難しい気がした。しかし、予想に反して、子どもたちは「私の掃除場所は砂でいっぱい。頑張って減らすようにしたい」

「私は教室掃除で今日あまりゴミをとれなかったから明日はもっと頑張る」のように話すことができていた。いつも何度も練習しているからこそ、この発問であったのだろう。毎日の積み重ねが見えた。

今回はいくつか授業を参観させていただいたが、中でも特に印象的であった道徳の授業について言及したい。この授業では「走れメロス」の物語から、自身の友達関係について考えていった。6年生に対して、このような課題ではどうしても恥ずかしさが勝ってしまい、正直に話すことは難しいように思われた。しかし、一人の発言を皮切りに、次々と素直な考えを発表している子どもたちの姿がそこにはあった。「僕は友達だと思っているけど、相手はどうなのか」「相手を疑わないと自分が傷つくこともある」「みんなセリヌンティウス王みたいになっていないか」等、自分の心の中でもかなり深いところまで踏み込んだ発言が多く見られた。また、最後に感想を書く時間があつた。発言をしていない子どもたちも今日話し合った内容について、感想用紙に自分の考えをびっしりと書き込んでいる姿が見られた。意見を述べていないからと

言っても何も考えていないわけではなく、他の友達の意見を聞いてじっくりと自分の考えをまとめていたのだろう。クラス全体が一つのこういった道徳の課題に対して、真剣に取り組んでいる姿に私は感動を覚えていた。

「堀川小の研究も変わってしまったが、今も変わっていない部分がある。それは子ども理解を大切にしているという点である」という今回案内してくださった石田先生の言葉を思い出す。一人ひとりを丁寧に見取り確かな子ども理解をもとに行われる「堀川式の授業」は、道徳という教科で最もその良さが発揮されるのではないだろうか。教師が子ども一人ひとりの実態を正確に把握し題材を選んだからこそ、これだけ子どもたち一人ひとりが考えを深められたのだろう。今回の道徳の授業において、あれだけ課題を自分事として捉えて考えていた子どもたちの姿から、私はそう考えた。

教職専門性開発コース2年 筏井 紀代美

今回、私は初めて堀川小学校に伺うことができ、非常に心待ちにしていました。当日の朝はなかなか寒さが厳しかったですが、元気に登校してくる子どもたちの姿に非常に心が癒されました。

まず、私のはじめに驚いたのは朝の清掃の時間です。堀川小学校では、学年ごとに割り当てられているエリアの中で、自分の決めた範囲を自主的に掃除するという事です。寒さの厳しい中、校門の扉を拭いたり、廊下を子どもたち4人で隙間なく横一列に並んで拭いたりなど、自分の決めた場所を丁寧に掃除している姿が印象的でした。自分の決めたことを黙々と、きちんとやり遂げている姿が素晴らしく感じ、こうした姿はどのような指導があつてのものだろうと非常に気になりました。

授業では、これまでに子どもが抱いた疑問などを基にして話を進めているのが印象的でした。私が参観していたとある教室では、教室後方に、数名の児童の“これまでの疑問”が日付入りで掲載されていました。その中には授業で発言した児童のものもありました。私は、子どもは今までの自分の興味関心と照らし合わせながら他者の話を聞いたり、自分の考えを捉え直そうとしたりしているのだということを感じました。「くらしのたしかめ」（その日一日の思いや目標をクラスみんなで聴き合う時間）などが特にそうですが、学級の中で、一人の子ども意見のみならずみんなで聴き合い、共有し合う時間が非常に大切にされているように感じました。参観させて頂いて、子どもが素直に、時には自分の内面の悩みや葛藤ま

でもさらけ出して自分の思いや考えを伝える様子が印象的でしたが、それはこのように、互いに語りを聴き合い、受け止め合える関係が子どもの中に培われているからなのではないかと感じました。

今回、堀川小学校に伺った後、同じく堀川小学校に伺った教職大学院の先生方や院生同士で話す機会がありました。そこで、堀川小学校の授業は、子ども一人一人の思考の流れをあらかじめ想定した上で作られているのではないかという話が出ました。“子ども”という曖昧なものではなく、“このクラスの〇〇さん”という特定の子どもの存在があつての授業だと思います。



現在、私が課題別実習を行っている福井大学教育地域科学部附属中学校でも、研究のひとつの視点として、

“見取り”ということを非常に大切にしています。音声言語や表情などから見取ることも大切ですが、それだけで全てを見取り切れない場合は、文字言語などで子どもの思考の展開をなぞることも大切だと考えます。子どもの思考の流れに合わせて、見取りやすい方法は変わってくるのではないかと考えます。今回、堀川小学校に伺う

ことができ、非常に丁寧な見取りを授業に活かしておられることが分かり、大いに刺激を受けることができたので、今後の自身の学びに積極的に活かしていきたいと考えます。

教職専門性開発コース2年 堀江 春那

2月12日(水)、富山市立堀川小学校に授業参観に行った。私は、M1の夏期集中講座で堀川小学校の研究・実践の書籍である『生き方が育つ授業』を読み、堀川小学校では「子ども理解」「追究」を重要視していることを知った。そして、一度は堀川小学校に行き、子どもや先生方の様子を見てみたいと思っていた。

実際に堀川小学校に行き、子どもたちの生活の様子や授業の様子を参観させていただいたり、懇談会で堀川小学校の研究や実践について話を聞いたりした。その中で印象に残ったことは、「朝活動」と「くらしのたしかめ」と呼ばれる活動での子どもたちの様子と、懇談会で語られた徹底的な聴くことへの姿勢である。

「朝活動」とは、8:10~8:20に行われる掃除のことである。堀川小学校では、子どもが自分で掃除すべき場所を探して掃除をする。学年ごとに掃除するエリアが決められ、エリア図が廊下に掲示されている。子どもは決められたエリア内で自分が掃除する場所を決め、自分の名前のマグネットを掃除場所に動かすため、掲示されたエリア図を見れば誰がどこを掃除しているかが分かるようになっている。私はこの日、

け置いてある)机を動かして拭いたら?」と声をかけた。机の下はすでに拭かれていたが、数人の子どもが廊下に置いてある雑巾かけの下が汚れていると気付いたようで、雑巾かけを動かして時間が過ぎるまでそこを拭いていた。私はこれらの様子を見ていて、子どもの動きが何とも自然であると感じた。意識はコンスタントに掃除に向いており、自分が気付いたところを思うままに掃除している。楽しんでいるようにさえ見えた。その様子のどこに教育的価値があるかを私はまだ語れないが、「人に言われるから掃除をする」のではなく「汚れているから掃除をする」という自然な子どもの行動に見え、それはどの子ども取り組みやすいのではないかと感じた。

「くらしのたしかめ」とは、一般的に朝の会、帰りの会などが行われるような授業前や後に行われる活動である。そこでは、まず1人の児童が頑張ったことやその日のめあてを発表する。私が観た1年生のクラスでは「朝活動でいっぱい砂がとれた」と発表していた。そして、周りの生徒がその子に様々な質問をしていく。参観したクラスでは「いっぱいってどれくらいですか」「どうして今日はいっぱいとれたのですか」などの質問がすぐに出てきた。時折教師が「今日はどうやって掃除をしたのか、お話できる?」「このお話を聞いて皆はどう思った?」など質問を入れて話し合いを深め、広げていた。私は、子どもの質問の鋭さにも驚いたが、もっとも驚いたことは、全ての子どもが話を集中して聴いていることである。多少姿勢が崩れていても、視線は話している子どもや教師に向いていた。うまく言いたいことが言えずに長くなってしまう子ども、周りの子がじっと聞いているので、教師の助けもあって最後まで思うことを言葉にすることが出来た。私には、子どもたちの相手の話を聴く姿勢が、相手を認める姿勢に見えた。ここで感じた子どもの聴く力について、懇談会では次のように話された。



1年生の教室前廊下の掃除を参観した。廊下の掃除を始めた子どもたちは、初めはそれぞれ自分の周りを拭いたり横方向に拭いたりしていたが、一人の子どもの発案から競争のようにしながら廊下を縦に拭いていった。それも少しすると、それぞれ別の場所を掃除し始めた。その後、教師が通りがかりに「(廊下に一つだ

授業の中で最も大切なことは、教師がよき聴き手であることである。子どもの思い、言いたいことを受け止め、価値づける。「そうやって頑張ってきたんだね」と。聴いてもらえる安心感があるから子どもは自

分の思いを表出することができる。「他の子のお話を聴きましょう」と言われても聴き合うことはできない。お互いに聴き合うことの素晴らしさを体感することで、聴き合うことができる。(記憶をもとに書いたので言葉は確かではない。私の受け止めた言葉である)

分かるような、分からないような感じだったが、「聴いてもらえる安心感があるから子どもは自分の思いを表出することができる」ということは共感できた。それは私自身があまり自分の考えを表出することが得意ではないからかもしれない。あるいは、音声言語をほとんど使用しないような重複障害の子どもの思いを考えてきたからかもしれない。自分の思いや考え

を表出したり、相手の思いや考えを聴いたりすることは、どんな子どもにとっても価値のあることなのではないかと感じた。

私は、堀川小学校の子どもの姿をほんの一部だが観させてもらい、いくつも自分の琴線に触れることがあった。それらは、自分の内の価値観に深く関係しているのだと思う。子どもが自然に動ける子どもの文脈を大切にしていくこと、子ども同士が聴き合い、認め合うことなどに自分が価値を感じていることに気づくことが出来た。だが、その価値は何に保障されるものでもない、感覚的なものである。私は、その価値を大切にしながらも疑いながら、今後も学び続けていきたい。

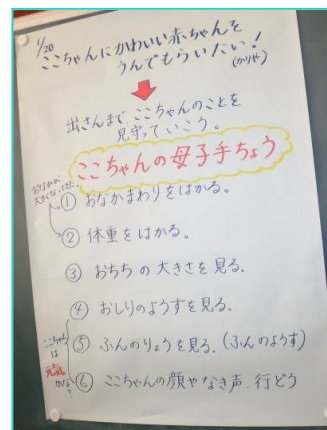
カリタス小学校 授業研究会に参加して



福井大学教職大学院 准教授 小林 真由美

1月27日、28日品川区立小中一貫校視察、文教施設研究講演会とカリタス小学校の授業研究会に同行させていただけることになった。修論で忙しい院生をおいていくのは申し訳ないと思いつつも、以前から一度行ってみたい学校の一つ、カリタス小学校への訪問を果たすことができた。実践記録からは伊那小学校と似ているように感じたが、私学であること、女子校であることなど、訪れてみるとまた独特の雰囲気が感じられた。はやりの結婚式場のような素敵な建物の中にいるからか、子どもたちもどこか上品で、本時の山羊を育てるという課題に対してどこまで本気で関わっているのか、授業参観させていただくのが楽しみだった。

山羊は妊娠中であと一か月のうちに出産するということで、「いろいろ変わってきた」と子どもたちが次々、観察の様子を語り出す。「そわそわしてる」「いつもなら脱走するのにしなかった」「お尻が赤くなってきた」「糞もつるつる」「鳴き声のめーが連続してる」あふれる言葉を抑えて、先生から今日やりたいことが掲げられる。見る観点は「顔、鳴き声、行動、おしり、糞、お乳」やることはお腹周りを測ること、体重測定、そして本時の大きな目標は「ここのちやんの母子手帳を作ろう。」ただの観察記録とは違う。母子手帳ということは、子どもたちは自分のためでは



なく、ここのちやんのために作るのだ。そして母子手帳というからにはそこには感想ではなく、客観的な見取りが必要である。2年生の子どもにそこまでできるのか、私はわくわくしながらここのちやんのいる外へ出た。

ここのちやんはたくさんさんの参観者に興奮気味で、いつもより子供たちも扱いづらそうであった。まず感じたことは、子供たちが赤ちゃんの存在を大きく感じている、というよりむしろ感じたがっているということ。体重を測ってみると最初は40キロ、「えー？もう一回。」42キロになって「ふえてるう」と嬉しそう。体重は増えているべき！なのだ。腹位も初めは1m5cm、測り直して1m10cmで満足。赤ちゃんがいるというドラマは彼女たちの頭の中で、膨れ上がっている。「足と首が細くなってきている」「その分、お腹にいつてるんだよ」「赤ちゃんのほうに血がいつてるんだ」「血？栄養でしょ」「そうそう、栄養、お母さんもそう言っ

てた」実は赤ちゃんができていくという医学的な保障は得ておらず、先生も確信はないと聞いて驚いた。子どもたちの観察は、心のどこかで「赤ちゃんがいてほしい」という願いなのだ。母子手帳には私が期待した客観的な医学的表現ではなく、「今日はストレスがすごかったです。涙目になっていて・・・」「赤ちゃんを守るためにはじっこによって」と子を思う母の姿や自分の身を削って子に捧げる母の姿まで想定し、こちゃんをその自分の主観に基づいて観察している。女の子という特性かもしれない。その一途さこそが本当の子どもたちの姿だと、客観的な観察を要求していた私自身に苦笑した。その上で、この後、子どもたちがどうやってこちゃんに関わっていくことが本当に育てる事なのか、妊娠中で苦しいこちゃんを押さえつけて体重を測ることが本当にこちゃんのためなのか。考えさせていく課題はあるかもしれない。研究会



ではそんな課題についてもじっくりと語り合うことができた。私が最も驚いたのは、すてきな授業もさることながら、この研究会である。先生方の「授業研究を通して学んでいきたい」という熱い気迫を感じた。次々に子どもの様子が伝えられ、見取りが語り合われる。その見取りはすぐに別の先生から「でも私はそれは・・・」と覆される。「みんなが一生懸命だったわけではない。」と私が見えていなかった子どものこと

も語られる。子どもたちを見た事実だけでなく、そこから見つけだしていく自分の見取りのストーリー、久しぶりに考えが深まった研究会であった。最近、自分自身を悩ませていた「何のために研究会を行うのか」という問いへの1つの答えが見えた気がした。

二日目は附属小中学校の先生方と一緒に品川区立の小中一貫校である日野学園を訪れた。1～4年、5～9年というくくりで5年生以上は中学生のように扱われる。屋上の野菜園、地下の体育館やプール、ネット



ワークの職員朝礼、内線電話の携帯化、職員会議中の指導員による補習など驚きの連続であった。

続けて午後の文科省で行われた講演会では、丸岡南中を作った工藤和美氏の話が印象的であった。「建築が学校を変える」ことを改めて感じた。そこには建築家としての「子どもたちと地域への教育」への情熱が根付いている。子どもを動かすのは何も教員だけではない、教育を担っているのは教員だけではないのである。みんなが明日の子どもたちのために一生懸命考え、一生懸命動いている。では、自分にはいったい何ができるのか、自分は何をすべきか・・・そう考えたとき、カリタスの子どもたちの真剣な眼差しが再びよみがえってきて、改めて気を奮い立たせられた有意義な2日間であったことを実感したのだった。

伊那市立伊那小学校 公開研究会に参加して



福井大学教職大学院 教授 森 透

去る2月8日(土)長野県伊那市立伊那小学校の公開研に学部学生1年生約40名と夜行バスで参加して

きた。今回は学部の授業「教科生活基礎」という生活科の授業(受講者約60名)で希望者を募り約40名

が参加した。今まで約20年間、基本的に毎年学生を連れて参加してきているが、今回は伊那市で大雪に遭うという初めての体験をした。一度だけ福井県が大雪で伊那行きを中止したことはあったが、雪の少ない伊那市にも関わらず今回は全国的な大雪情報で高速道路とJRはすべて全面通行止めとなった。夕方に研究集会が終了しそのまま高速道路で帰れば大学には10時までに帰れるのであるが、今回は渋滞の国道を通りのろのろ運転で伊那市から北上し、白馬村を通り糸魚川インターに入ったのが、翌朝の7時、大学に戻ったのが10時という大変さであった。学生が40名もバスに乗っているのに食事とトイレが一番心配であったが、途中コンビニを利用しつつ何とか全員無事に帰ることができた。いつも帰りのバスの中で、学生たちにマイクで今日の参観で一番印象に残ったことを一言ずつ話してもらうのであるが、伊那小の子どもたちの様子をいろいろと感じたままに話してくれた。全体的に伊那小の子どもたちのエネルギーとすごさを感じたようである。やはり総合学習を中核とした実践なので、子どもたちの興味・関心や意欲が前面にでる実践だからであろうか。昼の食事のときのトン汁のサービスに感激した学生もいた。

さて、私は自由参観授業のときは自由に各教室を回ったが、音楽室で太鼓をたたいている6年生のクラスに入ってみた。卒業公演に向けての練習であったが、30名近い子どもたちがリズムを合わせていっせいにたたく醍醐味を味わってきた。次は、特別支援学級(けやき組)のクッキーを食べに行った。いつもこのクラスはほっとする教室空間で、とてもおいしいクッキーとケーキをごちそうになった。我が家へのお土産にも買っていった。値段もとても安かった。次はいよいよ共同参観授業である。動物を飼うクラスは2つあり、1年生の羊と3年生のアルパカであった。生活科の授業で来たので、1年生の羊のクラスに行った。授業会場は外のともがき広場であった。非常に寒い吹雪の中の授業で、1年生の中には寒くて泣いてい



る子どももいた。羊のゆめちゃんの体重を測定し「えさ」について考えるテーマであった。体重が増えない

のはなぜか、今の「えさ」(枯れ草)でよいのか、どのようにやったよいか、などを考える授業であった。先輩のクラスが羊を飼っていたので、昨年秋頃から飼い始めた1年生であるが、みんながゆめちゃんを大事にしていることが強く伝わってきた。先生も子どもたちと一緒に考え、子どもたちと一緒に歩んでいた。

午後の分科会では、1年生会場は80名近くいたので、4つのグループに分かれて参加者が一言ずつでも話すようにした。1グループ10名以上というのは話し合いにはなかなかならないのであるが、しかし一人一言ずつでも話す機会となったことはよかった。学生・院生・教師など、全国から参加したことが分かり、総合学習の熱が若干下がっている現状でみんな伊那小に関心を持ってきていることに嬉しくなった。

いよいよ子どもたちの「学習発表」である。5年生



の和菓子づくり、3年生の羊の実践。ともに感動する発表であった。特に3年生の羊の実践は1年生の授業を見たあとであったので、余計に感動した。以前「豚の飼育」の実践がビデオになり、子豚さんを飼育して涙ながらに出荷する子どもたちと、それを学習発表会で歌で表現した子どもたちと重なった。本当に子どもたちの思いが伝わってくる感動する発表であった。

最後はフォーラム「伊那小学校を語るー共同参観授業を通してみえてくるものー」であった。全体指導者の嶋野道弘先生(文教大学)が事情により来校できなくなったこともあり、急遽このようなフォーラムに変更したとのことであった。助言者の松木健一先生(福井大学教職大学院)のコーディネーターにより、各学年の助言者の先生方が登壇された。松木先生も言われていたが、共同参観授業を全体として考える場は今までなかったもので、このような企画は非常に大事であったと思った。しかし、急なフォーラムの場の設定であったこともあり、必ずしも議論がかみ合ったとは言えなかった。各学年の思いと1年生から6年生までの積み上げ、そして伊那小全体の目指すものが全体像として描かれればよかったが、なかなか難しい課題であった。しかし、このようなフォーラムに挑戦されたことは非常によかったのではないと思う。予定通り

16時15分に終了したが、私は帰りのことが非常に気になっていた。正門前で学生たちと記念撮影をして大雪の中をバスまで歩いていった。そして、最初に書いたように、大変な中で翌朝の10時に大学に戻れたのである。

伊那小では別行動で参加した教職大学院の院生た

今回、私は伊那小学校の研究集会に初めて参加した。これまでに、伊那小学校の著書を読んでいたこともあり、伊那小学校の研究集会をとっても楽しみにしていた。

2月8日(土)は、長野県全域に大雪警報が発令されており、伊那地域も大雪に見舞われていた。そのため、活動の内容を変更せざるをえないクラスが幾つか出てしまった。私の参観した授業(3年森組)も、本来ならば、アルパカ2頭(いふ君・ダビ君)をパラダイス(いふ君・ダビ君の喜ぶ場所)に連れて行き一緒に散歩する予定であった。しかし、大雪のためパラダイスでの散歩は中止となり、アルパカにチモシー(児童が育てた草でアルパカの大好物)を与えたり、雪かきをしたり、小屋を修理したりする活動となった。授業が始まってから、子どもたちは、アルパカにチモシーを食べさせるために小屋の外にアルパカを出そうとした。しかし、気温がとても低く、寒かったことや参観者が大勢いたことで、アルパカは外に出るのを嫌がり、なかなか小屋から出て来なかった。何とか、アルパカを外に出すために、数名の子どもが小屋の中に入り、いふ君・ダビ君に言葉を掛けたり、温めたりしていた。中には、チモシーを使って、外に誘い出そうとする子どももいた。それでも、アルパカは、外に出て来なかった。小屋の近くに大勢の人がいることで、アルパカが不安で出てこれられないと感じ取ったのか、一人の児童が、「〇〇君と〇〇君以外は、みんな離れよう。」と全体に向けて言った。その言葉に、大多数の子どもたちが反応し、小屋から離れたが、それでもアルパカは小屋から出てこなかった。それからしばらくして、アルパカも子どもたちの思いを感じ取ったのか、小屋から出てきた。しかし、アルパカは、児童の育てたチモシーを少し食べ、その後、すぐに小屋の中に戻ってしまった。アルパカにチモシーをあげた児童に教師が「食べてくれたねえ〜。良かったねえ〜。」と言った後、子どもたちを集めて「いふ君・ダビ君、少し出て来てくれたねえ。良かったねえ。これからは、いふ君・ダビ君のために自分の役割に分かれてお仕事頑張ってください。」と伝え、子どもたちは各々の役割に分かれ、活動することになった。子どもたちは、雪かきや小屋の修理など、自分の役割に一生懸命

ちと会うことができた。伊那小の実践は教職大学院にとっても非常に価値のある実践となっているので、多くのものを学んでくれればと期待している。実践記録だけではなく、実際に見て参観することは大きな意味があると思う。

教職専門性開発コース2年 孫野 貴之

取り組んでいた。私は、黙々と作業している子どもたちの姿から、いふ君・ダビ君への愛情と責任感を感じた。

子どもたちの仕事が一段落した頃、教師が子どもたちを庭の隅に集め、活動の振り返りを行った。子どもたちの多くは、いふ君・ダビくんが小屋から出て来るのを嫌がっていたことやチモシーをあまり食べなかった様子から「いふ君・ダビ君はハッピーじゃなかったと思います。今度は、いふ君・ダビ君がハッピーになってくれるように〇〇したいです。」という感想を述べていた。私は、自身の取り組みを振り返るだけでなく、次の展望を明確に語ることでできる子どもたちが凄いと思った。

この共同参観授業後、昼食休憩を挟み分科会となった。分科会では、悪天候により当初予定されていた活動とは異なる活動を行うに至った経緯を授業者の先生が話された。先生の話によると、子どもたちは、「雪が積もった中でも、いふ君とダビ君をパラダイスに連れていきたい。」という思いを持っていたようだ。しかし、先生は雪の積もった朝の時点で、「パラダイスに連れていけない」という決断をしていた。それでも、教師から子どもたちに「今日は、パラダイスへの散歩は中止する。」とは言わず、朝の会の時間を使って、総合の時間に何をするのか、話し合うことにした。すると、ある児童が、「この前、パラダイスに行くまでの細い橋を渡る時、いふ君・ダビ君の脚が震えていたよ。今日の天気でパラダイスに行くと、いふ君・ダビ君が怪我をしてしまうかもしれない。それに、いふ君・ダビ君だけじゃなくて、僕たちや先生たちも怪我をしてしまうかもしれない。」という発言をした。その言葉に他の児童も納得し、その後の話し合いを経て、本時のような活動(雪かき・小屋の修理など)になったと話されていた。

私は、この話を聞いて、教師が自分の思いを押し付けるのではなく、一旦、子どもたちにも考えさせて、子どもたちの思いを受け止めてあげることが重要なのではないかと考えた。そのような教師の姿勢が、「伊那の『子どもに沿った、のびのびとした温かい活動』に繋がっているのかなあ」と思った。

私も伊那の実践のように、自分(教師)の考えを子ども

に押し付けるのではなく、子どもたちとの対話・子ども同士の対話を大切にしながら、子どもたちにとって納得のい

く活動をつくり出すことのできる教師でありたいと思う。

教職専門性開発コース2年 瀧波 裕美

私は、2月8日に行われた伊那小学校の公開学習指導研究会に参加した。伊那小の公開研に参加するのは昨年度に引き続き二回目だった。昨年度は、伊那小の総合学習を見てただただ感銘を受けていた。授業の中で見られる光景が従来の教師対子どもではなく、教師が子どもの中に混ざって子どもと共に授業を行っている姿、子どもが主体的に動き、活動に取り組んでいる姿、子どもと子どもがかかわり合い、学んでいる姿がすごく印象的だった。そして、この伊那小での驚きと私自身が求めていた授業の中での教師の姿が合致したため、その後授業を行う際には“子どもと共に”ということを決意意識するようになった。しかし、伊那小の公開研を終えてからというもの、伊那小の授業に感嘆したこともあり、その姿ばかりを追い求め、伊那小の授業の背景に迫らずにいた。

しかし、今年改めて伊那小の研究会に参加し、昨年とはまた違った気づきを得ることができた。今年私は、伊那小の授業がどのようにして組み立てられているのか、ということに意識して研究会に参加していた。

自由参観では、昨年度も参観した3年川組の授業を参観し、改めて教師と子どもが一体となって授業が行われている姿に安心感を覚えた。

そして、その思いを抱いたまま共同参観の時間となり、6年剛組の授業を参観した。『小沢川を楽しく知りつくし隊』を学級テーマに掲げ、子どもたちは4年生の時から二年間小沢川で水遊びをしたり、生き物探しをしたり、橋の成り立ちや水害の歴史を調べたりして、小沢川と親しみを持ってきていた。その中で、自分たちの大好きな小沢川にごみがたくさん落ちていることに気付いた。そのことから、小沢川をごみのない親しみのもてる川にしたい、という思いを抱き6年生になってからごみ拾い活動を行ってきた。“小沢川を親しみのもてる川にするとはどういうことか”について考えた前時の学習を踏まえて、本時では【小沢川にもっと親しんでもらうために剛組ができることを考えよう】という課題設定で授業が進められた。授業の流れは、始めに本時の流れの説明を教師から受けた後は、最後までグループ活動であった。私が見ていたBグループでは、“見た目を良くしたい→プランターに花を植える→階段の隅っこに置く→プランターは卒業前に回収する”“イベントを行う→小沢川の歴史を伝える・釣りをする・小沢川ツアーをする→若い人に呼

びかける”など滞ることなく次から次へと意見が出てきていた。しかし、教師からより具体的に“若い人とは誰？小沢川ツアーはどの範囲とするの？プランターを置くのはどの階段？”などの指摘を受けると子どもたちは行き詰ってしまった。他のグループにいき、新たなアイデアを得てくるものの、できるもの・できそうにないもの・できないもの、の絞り込みの時間に入ると出てきた意見の大半ができそうにないもの・できないものに分類され、子どもたちからは自分たちで出し合った意見ではあったが、「え～ほとんどできないじゃん」と素直な気持ちをこぼしていた。この授業を終えて私は何か今一つ物足りない思いになった。最後に全体でまとめることなく終わり、目の前の子どもたちの姿からは「これだ！」というような思いを持たずに終わった印象を受け、この授業での学びは何だったのだろう、と感じてしまったからのように思う。今一つ深く踏み込めずに終わってしまった感があつた。

しかし、授業研究会での助言者である松木先生の話を受けて納得した。彼らは今全体で何かをしよう、と



いうよりは一人一人が真剣に小沢川のことを考え、卒業までののこり数か月ではなく、もっと先を見て「今、自分にできることは何か、小沢川の近くに住む近隣住民としてどう生きていくか、自分がどうふるまい、どう生きていくか、など」の問いにぶつかり模索している時期などだということを理解した。個々がそれぞれにこれまで親しんできた小沢川をどう伝え、浸透させていくか、三年間かかわってきた小沢川のことだからこそじっくり考え答えを出そうとしているのだ。そして、教師自身もそれを理解し、子どもたちの葛藤にじっくり寄り添い、待つべき時であるということ

を知った。三年間かわる中でいろんな現実と直面し戸惑ってきた子どもたちだからこそ、今自分たちは当事者として何をするか、という難しい問いをぶつかっているのだと改めて授業を振り返って感じた。そして、こうした授業を行える場こそが伊那小学校なのだろう、と改めて実感した。

どのようにしたらこのような学びを展開できるのだろうか。2回の参観を経て、私なりに考え出した答えは、以下の三点である。伊那小の授業は一時間では完結しない。伊那小の総合学習であれば、三年間を貫いた計画が綿密に立てられている。さらに、教師の子どもを見取る目の細かさ。一人一人の学びを見取り、個々に応じた願いや思いを抱き、授業にあたっている。最後に、教師の願いと子どもの思い・願いとが合致している点である。日頃の丁寧な子どもの見とりをもとに個々の歩む道を理解するとともにそこに教師の願いも合わさっている。また、ついつい教えたくなくなってしまふ私だが、伊那小の先生方の子どもを待つ姿勢は見習うべきものがあると感じた。

しかし、伊那小の実践は決して遠いところにあるものではない。私自身もこれから授業を行うにあたり、子どもの見取り、待つ姿勢は基本とし、子どもの学び

がつながっていくように単元での流れ、教科間のつながりなどを意識して前時の学びを受けて次へを繰り返す最終的な目標に向かって進んでいくという思いを常に持って授業を行っていきたいと感じた。

さらに、昨年度見た2年生の“ひつじさんといっしょ”の実践が今年度は集大成として学習発表会で発表された。昨年度の子どもたちの姿も見ていたからこそ、その過程が少なからず感じられ、とても感動した。3年間という長い年月をかけてかかわってきたからこそその思い入れもとても強く、自分たちで作った歌を泣きながら歌っている子も見受けられた。また、学級としてのまとまりと温かさも感じられ、私が思い描く“互いに認め合い、高め合うことのできる温かい学級”の雰囲気を見て感じ取ることができ、嬉しかった。

これまで私は、いろいろな仲間とかかわり合いながら成長していく子どもについて考えてきたが、伊那小の姿から長期的な視点で子どもを育てていくことの良さも感じ取ることができた。両者を一緒にというのは難しいが、これから現場に出て子どもたちの成長を支え、後押ししていく存在として日々考えながら精進していきたいという思いになった。

教職専門性開発コース2年 後藤 歩実

全国的に大雪となった日、伊那の地にも多くの雪が積もっていました。今回の伊那小学校の研究大会は、昨年度に引き続き二回目の参加でした。

昨年度は2年生の子ども達が伊那小でいう「材」である羊のめあちゃんとまもるくん真剣に向き合うからこそ出てくる言葉を聞いて2年生とは思えない発言や行動に驚かされるばかりでした。そんな伊那小の子どもたちの姿を見て、主体的に学ぶということは材に自分からかかわりに行くということなのだと感じ、私自身の授業実践を子どもの姿を中心に振り返るきっかけとなりました。

今年度は長期実践報告書を書き上げ、伊那小学校の実践が昨年度とはまた違って見えるのではないかと考えわくわくした期待をもって向かい、福井に帰ってきた今、行く前の期待を上回るものだったと感じています。

共同参観では、4年生の「作って揚げよう 夏組 凧」を参観しました。一人ひとりの子どもたちがそれぞれのペース、それぞれのスタイルで凧を作っていました。あいにくの天気のため外で試し揚げが出来ず、急遽扇風機を廊下に設置して試し揚げをすることになりました。子どもたちは、糸目（凧と凧糸をつなぐ部分）やしっぽ（凧の下の方に付けられているもの）を修正しては試し揚げをしていました。しかし、普段使わな

い扇風機を使ってみた男の子は「自然の風はこんなじゃない…。」と言って早々に教室に戻ってしまい、違う女の子も「器械に頼るよりも自然の風や自分で走って揚げる方がいいと思いました。」と言っていました。授業後の研究協議会では、そのような子どもたちの姿を他の先生方と語り合い、子どもたちがこれまで凧を通して無意識のうちに自然の風を感じとり、凧と対話しながら活動してきたのだということを感じ、これからの活動の展開として、目に見えない風を意識しながらクラス全員が50m揚げることを目指していくのだという展望が見えたように思いました。

学習発表会では、体の芯から凍ってしまうような寒い体育館で体をこわばらせて小さくなっている私たちとは対照的に、子どもたちはそんな寒ささえも吹き飛ばすエネルギーを発しながらステージ上で輝いていました。それはただ、練習を重ねたことによる表現力の高さだけではなく、子どもたちの内から出てくる真の感情、またこれまでの経験によって蓄えられてきたエネルギーを言葉の一つひとつに込めて、体全体で発信しているように感じました。そんな子どもたちの姿にいつの間にか私も背筋を伸ばして聞き入っていました。

今回伊那小の公開学習指導研究会に参加して、「内から育つ」子どもたちの姿を見ることができたように

思います。子どもたちは失敗することが当たり前と考え、それを恐れることなくどんどん挑戦しており、その積み重ねによって探求する姿勢が出来ていました。だからこそ、教師に与えられたもの（凧揚げの授業という扇風機）に対しても鵜呑みにせず、自分たちでその良し悪しを判断することが出来ているのだと感じました。

学部時代から伊那小の教育については文献や授業記録などを通して触れる機会が多くありました。昨年度と今年度伊那小に行き、ただ「すごいな～」と感じていたものがだんだん目指したい教育の目標になってきたように感じています。「子どもたちの学び」を大切にできる教師を私も目指し続けたいと思います。

教職専門性開発コース1年 天谷 美伶

私は教職大学院に入学するまでの4年間、長野県で大学生活を送っていたにも関わらず、伊那小学校の名を聞いたことがありませんでした。夏期集中講座で『学ぶ力を育てる』を読み、伊那小学校は長い年月をかけ、「まこと」（真事、真言、誠）の教育を目標とする実践を育ててきた学校であると分かりました。子どもが活動し、学習する「たね」「求め」「芽」をどのようにして発見するか、発見したものをどのように学習として組織化するかを研究し続けている学校であり、この「芽」が、子どもたちの学習の基盤となる「材」になるのだと解釈しました。しかし、日々のインターンシップで小学校2年生の子どもたちや先生方とかわっている私にとって、伊那小学校の実践は「本当にこんなことができるのか？」と疑問を感じさせるものでした。総合学習のなかで、どのようにして様々な領域を網羅する学習展開を図っているのか、実際に見てみたいと思い研究会に参加しました。

共同参観では、インターンで入らせていただいている学年と同じ、2年生の子どもたちの姿を見させていただきました。ここでの「材」は「わき水の森」であり、この日も森の中での活動を参観する予定でしたが、生憎の大雪警報で外に出られなくなってしまいました。いつもなら雨だろうと雪だろうと森に出かけるのに、今日は我慢しなければならぬことを知った子どもたちは、スキーウェアを着込んだ準備万端な姿で「せっかくだくさんの先生たちが来たのに、じゃあ僕たち何をしたらいいの？」と、がっかりした様子でした。先生が「森はどうなっているかな？」と問いかけると、子どもたちは「氷がいっぱいできてる」「木から雪がばさって落ちてくる」など、これまでの森での思い出から次々と想像し発言していきました。先生が写真を撮ってきたことを知り、「見せて！」「見たい！」と大騒ぎし、森への思いを持って余してそわそわしている様子でした。その後は先生と子どもたちが一緒になって「森には行けないけど、森のことを考えながらできることは何だろう」と考え、じっくり話し合っ「教室を森の雰囲気にする」ことになりました。森をイメージして川をつくったり地図に書き込んだりしていく子どもたちのなかで、わたしが注目して

いた子どもは、以前自分たちでつくった地図を前にしてマジックを大事に持ち、たまたま地図を触ってにこにこするものの、結局何も書き込まずに終わってしまいました。その子の行動だけ見ると、その時間は何もできなかった時間でしたが、その子の様子からは、森に行きたい気持ちを地図にのせ、心の中の森で石を拾ったり、川の水を触ったりして遊んでいるのだなということが伝わってきました。授業の終わりには、先生の「森のことを考えられてよかったね」という声に子どもたちがうなずき、みんなで森の方向を向いてあいさつをしました。子どもたちの心が森から離れた時間は一瞬も無かったかのように思います。

子どもたちの様子を見て、この子どもたちはただ森に行き遊びたいのではなく、森に興味があり、関心があり、目的があり、心から森を求めているのだなと思いました。「森で遊んだ、森での思い出」ではなく、「森と遊んだ、森との思い出」を、知識や経験の引き出しに出し入れする中で学びを進め、深めているのだろうと感じました。あるひとりの男の子は、森で氷の大きさを測りたいという思いからスケールを持って来ており、次回森に出た時には、森にあるいろんなものの長さを夢中で調べるのだろうと思いました。それが算数の「長さ」の学習になっていくのでしょうか、子どもが勝手に「長さ」の学習に向かったのではなく、教師が何か小さなきっかけを与えたことで、その子どもがスケールをもって来たのだろうと想像しました。子どもたちが心から森を求めているからこそ、そのために様々なことを学ぶ必要が出てきて、それを教師が見つけた子どもたちと一緒に拾い上げる。そのようにして、総合学習の中で様々な領域を学習していくのだろうと、納得することができました。

実際に伊那小学校の子どもたちや先生を見て、教師が「たね」をまき、子どもが「求め」ることで生まれた「芽」を教師が発見し「材」とすることで、今の子どもたちの姿があるのだと、以前よりも理解できたような気がします。取り組み自体は伊那小学校だからできることなのかもしれませんが、伊那小学校の先生方が大切にしている思いは、多くの人に何かを感じさせるものであると思います。私にとっては、夏期集中講

座に引き続き「学ぶとは何か」を考えさせられる一日となりました。教師になるにあたって、もち続けな

ればならない問いなのだろうと思います。

教職専門性開発コース1年 池田 郁

全国的に記録的な大雪となった、2月8日。長野県伊那市も朝起きると一面の銀世界でした。わたしたちが普段触っている雪とはちがって、長野の雪は、雪玉を作ることができないようなさらさらの雪。水分を含んでいない雪は、風が吹けば、砂のように舞い上がり、体を冷やします。福井とは違う雪質に興味を持って、子どもに戻ったかのように雪に触れたいとうずうずしている中、伊那の3年森組の子どもたちは雪の降りしきる中、自分たちがかわいがり、仲間のように育ててきた2頭のアルパカ、いふくんとタビくんのことを考えているようでした。急な大雪は、アルパカにとっても子どもたちにとっても予想外のことで、もうすぐお別れをしなくてはならない、いふくんとタビくんを山草のたくさんあるパラダイスに連れて行ってあげたいという当初の予定は、いふくんとタビくんの安全のために中止にすることを子どもたち自身が決めました。今回、参観させていただいた時間は、この大雪の中、2頭のアルパカのために“今”自分たちが何をしてあげることができるのか、子どもたちそれぞれが考え、行動に移す時間でした。私が参観した1時間は、子どもたちが実際に行動している時間でしたが、その前の時間、教室で話し合いが行われたそうです。雪が降っている中、外に散歩をさせてあげることがはたして、アルパカにとって本当にしてほしいことなのか、それは自分たちが自分たちのしたいことかわいがあるだけではないのか。小学校3年生が、自分の欲求をこらえて、相手が一番してほしいことを考えることができるのです。クラス全員の子が、アルパカの気持ちを第一に考えての行動であるかはわかりません。周りの子に流されてなんとなく行動していた子もいるかもしれませんが、雪が降っている中、誰一人寒いと文句を言っている子はいませんでした。手をこすり、足踏みをしている子も、子どもたち内で指示が出れば走って小屋まで行く姿を見て、私はすごいなと感動しました。2頭のアルパカを通して、子どもたち自

身の関係もきっとよりよいものになっていっているのではないかと想像できます。雪かきをしてあげる子、小屋の窓を閉じて暖かくなるようにしてあげる子、えさを食べさせてあげる子。各々が自分のできることを考え、行動する姿をみることができました。3年生くらいだったら、みんながえさを食べさせたくてケンカになることもあるかもしれません。しかし、森組の子たちは、言い合いさえもしません。あの子がやってくれるなら、他に私ができること、する必要があることを考え、行動しているようでした。動物の飼育を通して、子どもたちは多くのことを学んできたと思います。アルパカ“で”遊んでいる姿から、アルパカ“と共に”遊び、最終的にはアルパカ“になる”ことを子どもたちが日々の動物とのふれあいや、子どもたち同士での話し合いで発見していくことができると思います。全員が全員できるわけではないと思いますが、それぞれ何かしらの気持ちや考えの変化に伴い、成長しているのではないかと想像することができました。

総合学習に力を入れている伊那小のことを知ったのは、夏でした。伊那小の実践を読み興味を持ったことが始まりです。3年を1サイクルとして一つのことを取り組みます。自分の想像している小学校の様子とあまりにもかけ離れており、想像もつきませんでした。子どもの様子も、本に書いてあるのは一部の子だけなのではないかと思ったりもしました。それを自分の目で確かめに行こうというのが、今回参加することを決めた理由になります。全員が全員、求めている姿に成長することは難しいことかもしれませんが、個々の成長は間違いなくあると私は思いました。なかなか伊那小と同じことができる学校はないと思います。しかし、この伊那の子の姿からわたしたち教師を目指す人間が、得る思いはたくさんあると思います。確かめに行き、よかったと思います。今回、参加できてとても満足しています。

スクールリーダー養成コース2年／小浜市立雲浜小学校 富士 健一

25年ぶりに伊那小学校を訪れました。雪が降りしきる厳寒の朝、登校した子どもたちは、ごく当たり前の仕事として、飼っている動物のえさやりや小屋の掃除を行っていました。「それ、何のえさ？」と問い

かけると大粒のペレットをえさ用バケツに移していた男の子は、いたずらっぽい笑顔を見せただけで淡々と作業を続け、そのまま小屋の方へ向かっていきました。その子が小屋の扉を開けると、何と2頭のアルパ

カの姿が！！「あれが、いふくんとたびくんか。」驚いている私に、小屋から出てきたその子はもう一度いたずらっぽい笑顔を見せました。

3年生の子どもとアルパカとの触れ合い。そんな非日常が当たり前の暮らしになっているとんでもない光景。犬、羊、山羊…様々な動物と子どもたちが、伊那小学校の暮らしの中ではごく当たり前に結びついています。玄関には漬け物が売られ、ろうかでは甘酒が振る舞われています。そのどれもが子どもたちの手作りで、これまで味わったことがないほど滋味あふれるおいしさ！！参観者に声をかけながらクッキーの注文を取り、見事な連携プレーで販売する特別支援学級の子どもたち、黙々としかも器用に竹かごを編む子どもたち、染め物、劇や太鼓の練習…。子どもたちがのびのび、生き生きと活動する姿があちらこちらで輝いています。担任の先生がどこにいるのかよくわからないほど、子どもたち同士が活動の中で自然に関わり合い対話しながら自分の思いを表現しています。そこで繰り返されている総合活動は、25年前に大学生だった私が目にした光景と何ら変わりがありませんでした。変わらないことのすごさ。当たり前のすばらしさ。それが、たった一日の学校生活の一コマの中でどれだけ感じられたことでしょうか。

酒井恵美先生が6年剛組で公開された授業は、身近な小沢川を通して学んできたこれまでのことを振り返りながら、卒業までのわずかな時間の中で何が出来るのかをグループで話し合う1時間。一見すると、淡々と進んでいく何気ない授業。派手さがあるわけでも、ドラマティックな展開があるわけでも、45分間で問題解決を図るわけでも、明確な学習パターンがあるわけでもなく、見せ物として起承転結を演出しようとするわけでもない地味な授業でした。けれど、子どもたちが過去を振り返る言葉の一つ一つ、その言葉をつなぎ合わせる中で生まれていく様々なイメージの何と豊かなこと！！とことん本物を体験し、とことん本気で考えてきたロングスパンの学びが育む感性の厚みがい

わじわと感じられる、手作り感いっぱい、地味ではあっても滋味豊かな味わいの授業でした。

授業研究会の中で出された、「酒井先生は、子どもたちに何をさせたいのか？」という問いに対して、「私が何かをさせたいわけではない。それを決めるのは子どもたちだ。」という短い言葉に、ものすごい迫力を感じました。それは、素材研究をしつくした上で本物に触れる活動の場を与え、その中で子どもたちが自分たちの力で本物を探し出すまで、ただひたすら子どもたちに寄り添い、待ち、耐える力量を持った先生だからこそ、そして、そんな学びの伝統を大切にしている学校の先生だからこそ語れる本質を驚づかみにした一言だからではないかと思いました。

子どもたち一人ひとりには、それぞれの思いがあります。学級とはそんな一人ひとりの思いを大切にしながら、みんなで何か一つのを築き上げていく学びの場であると思います。私は、そして私の所属する雲浜小学校は、伊那小学校のようなオリジナリティ溢れるダイナミックな活動を展開しているわけではありません。すばらしい活動だからといって、それらと同じように取り入れられるものでもありません。けれど、「内から育つ」という子どもを育てる本質を共有することは可能です。「教育のまこと」を追究する姿勢を大切にすることも可能です。「学びたいことを決めるのが子どもである」という発想で全ての教育活動に向き合うことも可能です。そんな、教育の本質を大切にしたいと強く思い、教育に夢を見出すことの出来る幸せな時間を過ごすことが出来ました。へとへとになって帰宅した私に「疲れるのに、わざわざ時間をかけて、寒い雪の中、どうしてそんな遠いところに行くの？」と不思議そうに問いかける6年生の娘に、伊那小学校の子どもたちが心を込めて作った野沢菜の漬け物を食べながら「幸せな心を見つけにいけるからだよ」と答えながら、その幸せな時間を再度かみしめました。

宇都宮大学教育学部

「大学との連携による 学校活性化フォーラム」に参加して



福井大学教職大学院 特命助教 藤井 佑介

2014年2月8日、関東地方が稀に見る大雪に見舞われる中、宇都宮大学にて「大学との連携による学

校活性化フォーラム～校内研究授業を元気にする～」が開催された。今年度で7回目となる開催であり、約

75名の参加であった。まず、午前中は学生・院生交流と連携研修事業研究会議が同時進行で行われ、福井大学教職大学院の教員及び院生は交流会の方へ参加した。交流会にはその他に宇都宮大学の教員、院生数名



と現職教員、それに加え玉川大学の松本修教授が参加されていた。簡単な自己紹介が行われた後は、宇都宮大学の久保田教授が後に行われるパネルディスカッションに先駆けて、宇都宮大学教職大学院設置構想を簡単に説明された所から、交流が始まった。話の焦点となったのは、それぞれの教職大学院のカリキュラムと教職大学院へ関わる学校（福井大学教職大学院で言えば連携校に当たる）への持続的な関わりとその引き際に関してであった。カリキュラムに関しては、年間を通じて省察の機会を設けることと長期インターンシップが設けられている（期間に違いはある）といった、実習（実践）を核としたコアカリキュラムが組み込まれているところは福井大学教職大学院と共通するところであった。異なる点は、共通5領域の科目に加え、授業改善に関する選択科目として各教科（例えば「国語授業デザイン論」等）が設けられていることと、1年次の前期に省察とプロジェクトの科目以外を集中して行う（講義形式）ことである。福井大学教職大学院の場合、教科別の科目を題して立ててはならず、学びの専門家としての教師の専門性を高めることに主眼を置いている。また、共通科目と選択科目に関しても、年間の実習と並行して省察を主体として遂行していく。それぞれの違いがそれぞれの教職大学院としての特徴や特色になっていると感じた。私の方からはいくつかの科目が同時並行的に進められている福井大学教職大学院のカリキュラムの概要の説明を行い、一つの疑問として、実習へ行く前のリフレクションの時間は何を行うのかと言った質問をさせていただいた。それに対して久保田教授からは、実習に向けての準備を行う、もしくは現職教員であればそれまでの実践を見直す機会である、といった回答をいただいた。福井大学教職大学院ではこのような実習事前に行う科目はないので、宇都宮大学で実現した際にはどのような成果や

課題がでるのか、設置（実施）後にまた、お聞きしたいと思う。次に教職大学院へ関わる学校への継続的なサポートについてである。宇都宮大学の場合、地域で名乗りを挙げた学校を連携校とし、連携して学校単位の課題に取り組んでいくことを目指しており、福井大学教職大学院もその理念については同じであると言える。連携校と関わって行く際に課題となるのはその引き際であり、大学教員が引き上げても研究や取組みの持続が可能であるかという話題となった。福井大学教職大学院の事例として船谷院生、高間院生が現職教員として、教職大学院の修了生がその学校へ残ったり、異動することで取組みの持続が可能になっていくことが述べられた。福井大学教職大学院の連携校の場合も院生がいなくなると、関わりが薄くなっていく現状がある。この点に関しては宇都宮大学とともに考えていくべき課題であると感じた。さらに交流会の中では、インターンシップにも触れられ、実際に実習をしている立場として小川院生と堀江院生が視野の広がりを中心とした説明を行ったり、現職の野尻院生からは多忙化と多忙感について教職大学院での実践を通して視点の改革が行われたことを述べたり、と大変有意義な交流会となった。



昼食を挟んで午後からはパネルディスカッションが行われた。開会挨拶として藤井佐知子学部長が登壇され、宇都宮大学における平成17年から始まったスクールサポートセンターと今回のフォーラムに関する説明がなされた。パネルディスカッションはコーディネーターとして松本敏教授（宇都宮大学）、パネリストとして久保田善彦教授（宇都宮大学）、松本修教授（玉川大学）の3名が進められた。まず、久保田教授から「成果を学校や地域に還元できる大学院」「学校のテーマや課題を共に解決できる大学院」としての宇都宮大学教職大学院設置構想に関する説明がなされた。前述の交流会で話された内容に加え、育成したい3つの力（学校改革力・授業力・個への対応力）や教育実践プロジェクトといった詳しい内容が話された。それに加え、松本修教授が教員養成評価機構の立

場から各地の教職大学院の状況に関して言及された。カリキュラムや実習、現職教員の派遣の在り方について語られる中で、福井大学教職大学院の実践にも触れられ、リフレクションを単位として位置づけていることを評価されていた。そこで、実際にインターン生を迎えている立場（教師や学校）がどのように考えているかという疑問について、福井大学教職大学院の高間院生がメンター、並びに院生としての立場で、現状について発言を行った。高間院生の話は栃木の現職教員には大変新鮮で、刺激的だったようである。驚かされていた様子が見て取れた。1時間半という時間があっという間に過ぎてしまい、パネルディスカッションは終了した。

その後、すぐに教育実践について語り合うラウンドテーブルが行われた。私はファシリテーターとして、6名のグループ（発表者2名）に参加した。一人目の発表は福井大学教職大学院の小川院生であり、学習と経験に関する巨視的な視点と微視的な視点、公教育についての報告を行った。他が現職の教員だったので、大変共感をされており、現在の小川院生の段階でそれに気付いていることのすばらしさを語っておられた。このような小川院生の成長に興味を持つことに派生して福井大学教職大学院の取組みの話題となり、インターンシップを含む日頃の様子を小川院生が説明を行った。そこでは、理論が先行するのではなく、実習をコアとし、日常的な課題に応じて理論を学習することで、実践と理論の架橋が行われることが説明されていた。二人目は栃木県内の芳賀教諭で、僻地での教育実践について語られた。学校が小規模であるからこそ、地域を巻き込んで実践を行っていくことが重要だということが伝わった。芳賀教諭が中心として関わっ

ていることが地域との協働を産み出しており、芳賀教諭がいなくなった時がどうなるかということも議論された。大切なのはそれらを持続することではなく、その学校へ来た教師らしさを持った関わりをすることだという意見が出された。ラウンドテーブルに参加する時はいつもそうであるが、時間があっという間に過ぎてしまう感覚に陥る。そこでは、語られる実践に傾聴し、共感し、思考を巡らす行為が行われる。様々な背景を持つ実践者が語り合い、考えを紡ぎ合う姿はとても有意義な時間である。今回の宇都宮においてもそのような姿を感じることができた。

一日を通して、福井大学以外の教職大学院の取組み（カリキュラム）を知ることで、改めて福井大学教職大学院の実践を見直すことができ、外観することができた。常に外部の状況や取組みに関してアンテナを張り、動向を捉えていくことがこれからの福井大学教職大学院での自分自身の実践にとっても有益なものになると考えさせられる機会となった。



スクールリーダー養成コース1年／福井県立藤島高等学校 野尻 友佳子

関東地方、数十年ぶりの記録的大雪。教室からの眺めは、福井大学からのそれと変わらない。いや、むしろ、細かな雪が風に乗って舞う吹雪の様相を呈し、福井よりも寂しさと不安をあおるような景色。そんな2月8日（土）、私たちは宇都宮大学で一日を過ごしました。

福井からは誰が参加するのか、何人参加するのか、何も知らされないまま前日に宇都宮入り。先日、浜松を破り日本一に返り咲いた「宇都宮餃子」の夕食（焼き餃子、水餃子たっぷり食べてしめて¥580なり！）を済ませ、「カクテルの町、宇都宮」とあるバーで軽く飲みながらバーテンとの会話を楽しんだあと、ラウンドテーブルの発表レジュメの見直しをして翌日に備えました。

当日の朝食時、偶然にも同じホテルに泊まっていた

中藤小の高間先生にお会いしー安心。宇都宮大学までは駅前から2キロ、ランナーの私にとっては軽いジョグで到着する距離だと考えていたところ、予期せぬ大雪。では、バスで、と高間先生とバスを待つもなかなかやっ来て来ない。慌ててタクシー乗り場に行くと長い列。そこで山口先生、ストレートマスターの堀江さん、小川さんと合流。何とか皆で大学に到着することができました。

山野下先生、杉山先生、藤井先生、半原先生、特別支援教育センターの船谷先生とも会場でお会いし、ようやく福井からのメンバー総勢10名が顔をそろえることとなりました。

午前中の学生・院生交流は20名ほどのこじんまりとした会で、活発な意見交流ができ、宇都宮大の教職

大学院設置構想と、栃木県の教師教育、学校活性化の実情を知ることができました。そのことで本学教職大学院を客観的に評価するきっかけを得ることができ、有意義なものとなりました。福井との一番の違いは、現職教員は2年間フルタイムで「大学院生」になるということです。定員は10名程度の現職教員と5名程度の学部卒生ということですから、福井より規模は小さいようです。連携協力校において理論と実践をつなぐという点では同じですが、必ずしも勤務校での実習にはならないという点については大きな違いを感じました。

午後には1時間半のパネルディスカッションの後、約2時間半のラウンドテーブルがありました。宇都宮大学では再来年度より教職大学院を開校するというので、私の発表は「福井大学教職大学院をよりよく知ってもらおう」ことを目標にしました。私の所属したテーブルCのメンバーは5人。栃木県総合教育センター指導主事の北條先生、那須塩原市立東奈須野中学校教務主任の津久井先生、そして本学の半原先生、元本学教授の長谷川先生という、宇都宮なのに、なぜかホームのような構成でした。私自身、入学するまで教職大学院のことは何も知らず、偏見がありました。ですが、この1年足らずで多くの人とのつながりがあり、視野が開かれ、思考に変革があったことを、ぜひとも多くの人に知ってもらいたいという思いは、同じテーブルの中で共有してもらえたのではないかと、思います。津久井先生の発表では、「学年内教員の連携（同僚性）」という視点で、多くの示唆を与えていただきました。教員間の「資本主義的競争」はしない、

という考えは実に納得させられるものです。クラス経営や授業力などで、他の先生と自分とを競べ、勝った負けたと、結局は足の引っ張り合いをすることの愚かさを改めて考えさせられました。何か問題が起こった際に「あの担任は何やってるんだ」「部活動顧問は何やってるんだ」と批判する視点ではなく、調整するという感覚が大切だということです。これらは、「大人の背中」を見せることで生徒たちの人間関係形成力や思いやりを育てていくことになる大切な考えだ、と議論も深まりました。

生徒のこと、学校のことを考え、よりよくしていきたいという熱い思いを持った先生方との交流ではいつも勇気をもらえるものですが、今回もまた、雪と寒さを吹き飛ばすような熱い一日を過ごすことができ、感謝しています。



教職専門性開発コース2年 堀江 沙也香

今年は暖冬だと油断していた2月8日、一面真っ白な雪に覆われた宇都宮大学でラウンドテーブルに参加してまいりました。宇都宮ラウンドテーブルでは、初めに新しく設置される教職大学院についての説明を聴きました。このようなカリキュラム関係の話を理解することは苦手なのですが、私が学んでいる福井大学教職大学院との違いは感じました。「実践」「語り」「傾聴」「リフレクション」「実践と理論の往還」など、福井大学教職大学院でもよく耳にする言葉がありましたが、使われている意味合いが少し異なるようにも感じられ、その違いについて考えながら交流に参加させていただきました。

そして、私は2年間の実践報告を「授業」に焦点を当てて行いました。私は地域の小学校の先生や校長先生、社会教育主事の方々がいらっしやるテーブルで報

告しました。ファシリテーターには福井大学教職大学院の杉山先生が入ってくださっていました。杉山先生が安心できる居心地の良さを作り出して下さること



に感謝しながら報告してきました。私は福井大学附属特別支援学校で学校実習の中で中心にかかわっている慎太（仮名）とのかかわり合いを通して、子どもに活動の枠組みを与える教師ではなく、ある活動の枠組みがあっても、その中で共に学習価値を見出し追究する教師になりたいと考えるようになったことを報告書の中の事例を交えながら報告しました。特別支援学校で行う教育は決して特別な教育ではないということを伝えられたらいいかな、という期待を込めながら話してきました。そして、ある社会教育主事の方から「慎太君は堀江さんが何かをすることだけではなく、そこにいることに意味があるのだら

う」と言って頂きました。私は、2年間自分の実践を話すことができる機会があればどのような場にも参加するようにしてきました。それは、このような場で自分の実践を語り、聴き手の方から頂く言葉は全て自分の実践を振り返るきっかけになるからです。今回も社会教育主事の方から頂いた言葉だけではなく、同じテーブルで一緒にさせて頂いた先生方から素敵な言葉を頂きました。振り返るきっかけをいただいたことを感謝しながら、次に宇都宮ラウンドテーブルが行われた際に再び報告者として参加させて頂きたいと思いました。

教職専門性開発コース2年 小川 駿也

2014年2月8日（土）、私は宇都宮大学で開催される宇都宮ラウンドテーブルに参加し、福井大学教職大学院、福井大学教育地域科学部附属中学校における2年間の経験をもとに、生徒の学習過程や生徒同士の学び合うコミュニティなど、学校や授業を捉える4つの次元について報告した。宇都宮には前日入りし、宇都宮餃子に舌鼓を打ち、当日を迎えたが、朝、ホテルの窓から外を見渡してみると、福井と見間違えうばかりの銀世界が広がっており、「今日のラウンドテーブルは何かあるのではないか？」という不思議な気持ちに駆られていた。

午前中の学生・院生交流の中心的内容は、宇都宮大学が平成27年度に設置予定の教職大学院の構想について、現職教員や福井大学教職大学院の先生方とともに意見交流をすることであった。福井では、福井大学教職大学院が平成20年度に設置され、学校現場での勤務を続けながら大学院で学ぶ学校拠点方式のもと、学部進学者の教職専門性開発コース、現職教員であるスクールリーダー養成コースとともに、たくさんの修了生を輩出している。また、福井県内の学校によっては、教職大学院の在學生と修了生がともに勤務するなど、自己の実践を語り合い、記録し、今後の実践への展望をひらくような省察的実践の学習スタイルが確実に広まっているようである。

宇都宮大学の教職大学院設置構想では、実習と省察が柱となるカリキュラムに福井との共通性が認められたが、現職院生は自身の勤務校を一旦離れて別の学校で実習に取り組むこと、その実習に向けて1年目前期に講義を通じた学びが用意されているといった点に福井との違いが感じられた。また、教職大学院のカリキュラム編成においては、大学と県や市町村の教育委員会や学校がいかに信頼関係を構築し、連携することができるのかという点が重要であることが再確認でき

た。現時点で、栃木県には教職大学院が存在していないため、午後のラウンドテーブルの実践報告のときにも、同じグループの現職教員の方々から、教職大学院における学びやカリキュラムについてたくさんの質問があった。

私のような学部進学者にとっては、福井大学教職大学院のように、週3日以上、2年間も学校現場での実践経験を積むことができる環境は、恵まれた環境であると言える。しかし、専門職大学院全体を見渡してみるならば、さまざまな課題が指摘されており、その解決に向けた議論も積み重ねられてきている。教職大学院においても、今以上に定員の確保と出口保障に目を向けたカリキュラム構成を考える必要があるのではないだろうか。もちろん、教職大学院生自身の自己研鑽は前提であるが、福井大学教職大学院は、学校拠点方式をはじめ、全国の教職大学院の先陣を切る存在であると感じているからこそ、そのようなことを強く期待したい。福井大学教職大学院で2年間学ぶことができたことの意味を強く感じた、ラウンドテーブルであった。



福井大学教職大学院

長期実践研究報告会に参加して

スクールリーダー養成コース2年／福井市中藤小学校 佐野 恭子

2年間の教職大学院生としての学びの過程をそれぞれが書きまとめた長期実践報告会が終わった。いつものカンファレンスとまた違った雰囲気が漂うコレボレーションホールだった。形となった互いの歩みを伝えようという緊張感が感じられた。何より、私自身が緊張していたのであった。自分のこのつたない歩みを、語るができるのだろうか。

思えば夏の集中から、冬期集中と長い期間を経てなんとか形になった報告であった。改めて日々の記録が大切だと感じた執筆期間であった。記録に残っている自分の言葉や想いも、今の段階で読み直して考え直すと、違った意味付けをすることが可能だった。もう一度意味付け直す大切さを執筆する中で体感できた。主担当の山口先生には校内研究の動きと私自身の思いが重なるように読めるが、本当にそうなのかを吟味して、「自分はどう考えていたのか。」を明確に意識して書き進めるようにアドバイスをいただいた。伴走してくださった山口先生の存在は、大きな励みだった。また、冬期集中の間、同じグループで進捗状況を話し合えたメンバーの存在も心強かった。そのメンバーも報告会でまとめあげた長期実践報告をどのように語っていたのだろうか。他の人の報告を聞ける日が楽しみである。

報告会は、質疑応答を合わせて一人80分であった。語り始める前は、長いなと思っていたが、実際は全く時間が足りない状況であった。一番伝えなかった今年度の校内研究の歩みの部分が、短くなってしまった。語っていると自分自身で筋を理解しているつもりでも、スムーズに語れないところもあって、もどかしかった。M1の皆さんにとって、聴いて自分の実践を振り返る時間となれるように、自分の歩みを一方的に語るだけの報告にならないようにする配慮が足りなかった。ラウンドテーブルで報告する際には、より構

想を練って、伝えるべきところを精選しなくてはいけないと大いに反省した。

しかし、同じグループの皆さんには、温かく聞いていただき、読み手、聞き手の立場から、さらに直すの良い点を教えていただいた。自校の「協働」について述べた長期実践報告であるが、今回の報告会も教職大学院での「協働」が生み出すコミュニケーションがあつてこそその貴重な場であった。異なるフレームから報告に対して反応を直接返していただき、中藤小の「協働」を生み出す単元づくりについてさらに強調するとよいことや、前の校内研究の成果と課題に触れるとよいことなどが見えてきた。原稿の修正に生かすことができ、本当にありがたかった。

ラウンドテーブルでは、さらに拓かれた関係の中で報告することになる。新たな「協働」の中で自分の実践が吟味されていくことが、また楽しみとなった。ラウンドテーブルでの新しいコミュニケーションの場に期待しながら、限られた時間内でしっかり語りたいたいという思いをもった報告会となった。



スクールリーダー養成コース1年／福井県教育庁嶺南教育事務所 加藤 勝代

4月から始まったカンファレンス。話し合いの明確な目的を求め暗黒の時代に入った数カ月を経て寒さが身に沁みるようになった頃、ようやくゆったりとした

気持ちでみなさんとの交流を楽しむことができるようになりました。しかし今回は、どうしても聴き取りたいことがあり、明確な目的を抱きながら長期実践報告

会を楽しみにしていました。

それは、2年間の実践研究を終えようとしている2年目の院生のみなさんは、最後にどのような言葉を語るのかということです。

入学当初にも「長期実践報告書」を数冊読みましたが、そのときは、具体的にどんな実践をしているのか、どのように研究を進めてきたのかという事実を追って読んでいました。しかし、その後の学びの中で、実践者が抱える現状や実践を進めるための課題は、どれも根っこは同じであることに気付きました。また、課題の克服が容易ではなく、たくさんの協力者をつくりながら失敗や成功を繰り返し、実践を続けていることも同じでした。

今、私は、新しい捉え方で現状を見つめ直し、実践内容を再検討している段階にいます。それは、4月に考えていたものよりも目標レベルの向上が伴うことだったため、改めてその壁の大きさを実感し、壁にぶつかっていくことに大きな不安を抱えています。

そのような今の自分がお二人の報告から聴き取ったことは、大きく分けて2点ありました。

- ・組織の中で改革を進める上での

リーダー性の発揮とは

- ・一人の院生が各職場で

教職大学院方式のシステムを作る理由

自分の実践は、自分にしか形作れません。ただし、他者からの学びによって、自分の足元を固めたり方向

性を確かにしたり、小さなひらめきのきっかけをもらったりします。

一人の院生としてできることは多くはないかもしれませんが、一人一人が創り出している小さな実践の輪をなくさないように、広がるように、つながるように継続していくことが大切なのだと考えるようになりました。輪の大きさや種類を気にするあまり実践が消えてしまわないように、改善策を模索し続ける一人でありたいと思います。

壁にぶつかる勇気をいただき、覚悟と開き直りを新たにした帰りの車中、思いがけなく具体的実践への小さなひらめきがありました。このひらめきのプレゼントが、教職大学院の学びそのものだと感じ、また頑張ろうと思いました。



教職専門性開発コース2年 小川 駿也

2014年2月15日(土)、長期実践研究報告書の報告会が行われた。2013年の冬から集中的に、教職大学院における2年間の実践を振り返り、捉え直し、そこから見えてきた自分自身の教師としての軸やこれからの展望について報告した。私の実践の中心は授業であり、学部時代、何が何やら分からないままに行っていた教育実習の経験から、教職大学院に進学し、生徒一人一人の学びや授業における生徒同士のコミュニティづくり、中学校3年間のカリキュラムを見通した授業づくり、さらには国家、社会の一員として必要な資質や能力など、私が学校や授業を複眼的に捉える視点を獲得した過程について報告した。私自身、教職大学院には教師としての課題意識を持って進学したわけではなく、教師としての軸ややりがい、何事にも自信がなかったことから、学校現場における2年間を通して武者修行を行うことがここに進学した大きな目的であった。そして、そのような宙ぶらりんな状態から、自分自身の授業実践や他者の授業参観、また、教員採用試験や地域の体験学習、県内外のラウンド

テーブルなどを経験し、この数か月間、じっくりとその足跡を捉え直したことで、上述のような複眼的な視点を獲得したのだと自己認知するに至ったのであった。同じグループの棟田章裕院生からは「経験を捉え直す力」についての話をもらったが、教師としての「省察力」については、この2年間で自然と鍛えられたように思う。

また、私にとっての学びはここで終わりではないことは、報告会の中でも強く実感した。この2年間はこれからの長い教員人生の原点に過ぎない。重要なのは、4月から学校現場に教職大学院生ではなく、現職教員として立ち、この2年間の学びをもとにどのような実践を積み重ねていくのかということである。とりあえず、自分自身によい意味でプレッシャーをかける意味でも、これからの小川駿也に期待してください。

教職専門性開発コース2年 堀江 沙也香

長期実践報告会は通常のコミュニケーションと何も変わらないような雰囲気で行われました。しかし、つい1週間ほど前に宇都宮大学ラウンドテーブルに参加していたため、このような各々の実践を語り合う場も他から見ればとても風変わりに見えるのかもしれないと考えていました。2年間の学校実習での学びは、30分程度の時間では語りつくすことができません。当日のテーブルに座るまで、私は何に焦点を当てて話そうか迷っていました。テーブルのメンバーの方を見て「今日は慎太（仮名）とのやりとりに焦点を当てて話そう」と決めました。

報告した内容について少し紹介させていただきます。私は、学校実習の中で小学部の慎太と中心にかかわっていました。慎太は物事の善悪は大体理解しているが、興味が向くと「見たい」「触りたい」「やりたい」などの気持ちが強くなり、衝動的に体が動いてしまうような子です。気持ちが高まると、唾を吐く、唾を自分の顔に塗る、泣く、嘔む、叩く、物を投げるなどの行動がでますが、それらの行動が良くないことと分かっている、自分で制御することが難しい場合が多かったです。しかし、本来は友達や先生とかわることが大好きであるため、そうした自分の行動を人に嫌がられることも気にしているようでした。実習開始当初の私は、慎太の気持ちよりも唾吐きや泣く、叩く等の行動をどうにか自分で抑えられる様になることが学校生活を送る上で大切であると考えていました。し

かし、慎太の行動にどのような意味があるのかに焦点化して考えた際に、自ら言葉にできない思いを表現する一つ的手段であると気づきました。そして、そうした慎太の中にある言葉を無理矢理引き出すのではなく、私が代弁したり、慎太の願いがかなうところまで手伝ってあげたりするかかわりに変わって行きました。そうすることで、慎太が学習活動に魅力を感じたり、自分からやりたいことを私に伝えてくるようになりました。それらの慎太の表現はまだ未熟ではありますが、かかわり手を介してより分かりやすい表現に変換することで慎太の思いは徐々に周りにも伝わりやすくなりました。

そうした実践の展開をテーブルのメンバーの方に話しました。柳澤先生には、実践の構造を捉えて慎太とのかかわりの中で転換のきっかけをつかんでいると言われました。私は「ああ、そうなのか…」とその場では頷いていました。今振り返れば、それは自分の実践を書いたり話したりしながら振り返り、その時々で意味づけていくことを何度も繰り返す中で少しずつ自分自身が変わっていったのだろうと思いました。私にとって今回の長期実践報告会もきっかけの1つです。今回新たに気付いた点を3月のラウンドテーブルで報告したいな、と新たな展望も抱けた報告会でした。

福井県特別支援教育センター 実践研究発表会に参加して

福井大学教職大学院 特命助教 半原 芳子

粉雪が舞う2月14日（金）福井県自治研修所にて行われた福井県特別支援教育センター主催の実践研究発表会に参加しました。あいにく後半のみの参加となりましたが、特別支援教育に関する会への参加は初めてだったこともあり、いくつかの新鮮な驚きがありました。ここでは紙幅も限られているためその中から二つをご紹介します。

一つ目の驚きは、発表者を含め会の参加者の方々の

所属が、幼稚園、小学校、中学校、高校、特別支援教育センター、大学と多機関で、さらには先生方のご専門も実に様々であるということでした。私は日本語教育が専門で、言語少数派つまり日本社会で日本語を母語としない成人と子どもの言葉の教育のあり方を追求しています。日本でいわゆるマイノリティーとされる方々への学習を考えている点において特別支援教育と日本語教育は共通点を持つと思っていますが、その日

本語教育では、機関別、専門領域別に研究会を持つことが非常に多いです。例えば、留学生の日本語教育に関わっている人達のアカデミック日本語教育の会、ビジネスパーソンの日本語教育に関わっている人達のビジネス日本語教育の会、地域の外国人住民の日本語教育に関わっている人達の地域日本語教育の会といった具合です。このことは私達日本語教師が、日本に住む外国人の生活や人生を断片的に捉えていることの顕れだろうと思います。今回、多機関の先生方、言い換えれば子どもが幼稚園生、小学生、中学生と成長していく過程で接するそれぞれの先生方が領域を越え共に学び合っている姿に、子どもの生涯に渡る成長を支えていこうとする先生方の強い思いを見たように思いました。

二つ目の驚きは、先生方の実践研究に実に多くの人・モノ・コトが出てくることでした。私が拝聴した鯖江市北中山幼稚園の大滝和枝先生、福井県立嶺南東特別支援学校の河端稔先生、福井県特別支援教育センターの野村陽子先生の三つのご発表だけでも、その中に、例えば人としては「幼児、子ども、職員、担任、教員、支援員、保護者、講師、センター所員」といった方々が、モノとしては「個人記録、絵本、ユニバーサルデザイン、ワークシート」といったものが、コトと

しては「基地ごっこ、組体操、給食、運動会、幼稚園と小学校との連携、縦割り保育、職員の合同研修会、校内研究」といった出来事がここに書き出せないほどたくさん出てきました。特別支援教育の先生方にとってそれらはあまりに当たり前で、それがどうしたと思われるかもしれません。しかし、そのことは教育の場が豊かな人間の営みの場であるからこそこのことで、日本語教育の実践研究にはたしてどれほどの人・モノ・コトが出てくるだろうと疑問に思いました。

人の生活や人生をつなげたものとして捉え生涯に渡る成長を支えていくこと、教育の場を人間活動そのものの場としていくこと。教育の本質に関わる大事なことを教わりました。日本語教育では日本語教育のあり方を考える議論の場に、当事者つまり日本語を学ぶ外国人の参加をどう実現させていこうかが課題となっています。特別支援教育ではその辺りがどのようになっているのか等、帰宅後聞いてみたいことがたくさん出てきました。今後も特別支援教育に関わる先生方との交流や議論を続けていきたいと思えます。

書評

共創社会の教師と教育実践

—「教師と教育実践」論への教育社会学的視座—

学文社 全313頁 2013年12月発行 5,000円

著者とは元同僚として福井大学で長く研究と教育をともに実践した者として、ここで本書の紹介をさせていただきたい。本来ならば、教育社会学の専門家が本格的な書評をすべきであろうが、教育学・教育史を専門とする評者からみた図書紹介ということでお許しいただきたいと思う。

本書の構成は以下の通りである。

はじめに

第1章 「教育実践」論への教育社会学的視座

—主に「相互行為理論」・「社会構成主義理論」の視角から—

第2章 「学力問題」の「脱構築」と「教育実践」論 —「学力論議・論争」を基軸として—

第3章 教育実践を基盤とした教師の「ライフヒストリー」的展開

—「教師への過程」「重要な他者」「教育的信念」「学校観・教師観」等を基軸として—

第4章 「共創社会」を創成する教師教育の再編成とその展開

—「協働的・反省的（省察的）実践力」の形成を基軸として—

第5章 「教育実践」に関する教育社会学的研究の課題 —教育社会学的研究の「アクチュアリティ—



あとがき

特に本書で評者が関係する箇所は第4章である。第4章は5節から構成されているが、第1節「再編成が要請される背景と論理」、第2節「『教員養成カリキュラム』の基本構造と内容の転換」、第3節「学部レベルにおける改革実践—事例的検討」、第4節「大学院レベルの改革実践の事例的検討—現職教師の「再教育」に関する改革実践」、第5節「『教師教育』改革の実現をめぐる今後の課題」である。

評者も含めて福井大学の教育学・心理学を専門とする私たちは、1980年代から附属学校の実践に関わり、学会発表をし、長期にわたる子どもたちの学びと教師の成長を跡付けることの重要性を学んできた。それらを通して学部・大学院のカリキュラム改革にも関わり、1990年代からライフパートナーと探求ネットワークという2つの大きなプロジェクト事業を始めたのである。前者は1994年度から福井市教育委員会等と協働して不登校の子どもたちのもとへ学生を派遣するプロジェクトであり、後者は1995年度より週休2日制の土曜日を活用して、月2回大学で小学生と学生が様々なテーマで活動する総合学習である。ともに現在まで継続されているプロジェクトであり、現在は正規のカリキュラムに組み込まれている。以上の福井大学のカリキュラム改革等の歴史については以下の論文を参照願いたい（森透「福井大学における教育実践研究と教師教育改革—1980年代以降の改革史と教職大学院の創設—」『教育学研究』第80巻第4号、2013年12月）。

著者は探求ネットワークについて評者の著作に触れながら以下のように述べている。

「森の説明を少し敷衍して整理してみると、『学校5日制』への対応という社会貢献的意義、直接体験が減少してきている生徒に対し、体験活動を基軸とした『学び』の実践を通して、探求力・表現力・問題解決力の向上を図ることを目指す教育的意義、『経験的な子ども理解』・『総合学習的な学びへの理解と基礎的な実践力の育成』・『教育実習的な学びとの連続性』など、教師への職業的社会的（「予期的社会的」）に対する貢献的意義などが、このような活動の社会的・教育的意義ということになる」（217頁）。

一方本書では福井大学における教職大学院の創設についても言及している。紙数の関係で詳しく触れることは出来ないが、著者は同じ大学の同僚としての立場から共感的に教職大学院の準備過程から創設後のスタッフの関わりについても叙述している。『教師教育研究』という福井大学教職大学院の研究紀要を分析しつつ、以下のように述べている。

「ここには、『教職大学院』に埋め込まれた教育課程（過程）の様々な経験を通して成長しつつある『現職院生』の実態が、指導教員の実感として総括されている。このような総括にいたるまでの過程における両者の相互作用が厚く記述されているがゆえに、このような実感は重みあるものとして伝わってくる」（270頁）

本書は私たちが1980年代以降に学部・大学院改革に取り組んできた歴史を、最も近い立場から観察し、一定距離を置きながらも共感的に叙述していると思われる。多くの方々にお勧めしたい。

（福井大学教職大学院 森 透）

Schedule

3/1 sat-3/2 sun 実践研究福井ラウンドテーブル2014

3/24 mon 学位記伝達式

【編集後記】

「雪国福井」には類を見ない雪のない冬が終わろうとしています。それでもまだ、もしかしたら「今から降るのかも」と恐れ続けている悲しい習性。寒くてつらい冬は、学びの蓄積の冬でもあります。今号では、堀川小、伊那小、カリタス小への参観、宇都宮ラウンド、県特支センター発表会など各地域、各学校の集大成を学んだ軌跡を紹介しました。そして、いよいよこの3月1日、2日の福井ラウンドテーブルを迎えます。互いの交流を通して、その学びがより一層深くなり、春からの前向きなチャレンジに繋がられたらと思います。（小林真由美）

教職大学院Newsletter No.60

2014.3.1発行

2014.3.1印刷

編集・発行・印刷

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京3-9-1

dptfukui@yahoo.co.jp

